「道ありき」から学ぶこと

　　　～真実に生きること～

『私は、特定の宗派に属してはいない。楽しさを活力源にし、自分らしさを失わずに充実した人生を送りたいと願っている凡人だ。三浦綾子文学ファンではある。その読書会企画の北海道ツアーがあり、以前旭川にも同行したほどだ。２０１１年からその読書会代表をなさっている森下辰衛氏の講演があることを知り、東高円寺にあるキリスト教会に、お話を伺いに行った。

戦時中、彼女は16歳からの七年間代用教員として小学校に勤務。軍国主義の真っただ中にあって、子どもたちに教え込むことになったのは「お国のために命を使うこと」だった。敗戦の翌年3月31日に退職、その三か月後に肺結核に。婚約者だった西中一郎や同じ病を患っていた前川正・三浦光世といった方々との交流は、絶望の状況からキリスト教を信じ受洗する過程でもある。カリエスを併発し13年にわたる闘病生活を強いられる。しかし、ひたすら誠実に真実を求め続けた作家人生において大きく実を結び、数々の小説・エッセイとして花ひらくことになる。彼女の作品は、真面目に熱く生きる人々を励まし続けるものが多い。「氷点」「母」「銃口」はぜひ読んでほしい小説だ。』　（緑区　橋本静修）